

国際交流演奏会における演奏・演出プロジェクト

松本奈穂子*；瀧健太郎*；北野忠**；倉元隆之**；近藤真由*；梶井龍太郎*

沖野成紀*；檜垣智也*

I.はじめに

II.グローバルフェスタ企画「世界♪音めぐり♪ 古楽器体験と学生演奏会」における

演奏と映像のコラボレーション

III.学生の活動と芸術学科音楽学課程第54回定期演奏会

IV.結び

I. はじめに

□本プロジェクトは、2024年度東海大学教養学部プロジェクトの一つである。2025年度にブルガリアの芸術アカデミーAcademy of Music, Dance and Fine Arts（AMDEFA）（注1）との国際交流合同演奏会を本学学生と開催できないかという打診が学長室からあったことが発端である。打診を学長室から受けた近藤が学科に相談をし、クラシック音楽の演奏実技系授業を担当する松本が学科学生のためにも演奏の機会を作ってあげられるのならば、と共に前向きに検討することとなった。先方がこれまでに海外で開催してきた演奏会は「地球を守ろう」というテーマを掲げていること、様々な視覚的演出も加えること、などが含まれており、本学との合同演奏会もそれを踏襲する形が求められた（注2）。そのため、2024年度中に2025年度の本格的な企画立案・運営に備えるために複数の目的に向けた下準備を始めた。この複数の目的とは①学生の演奏能力向上、②クラシック音楽舞台演奏と映像演出の融合、③映像演出で用いる環境関連視覚資料の収集、などである。プロジェクト・メンバーは教養学部芸術学科から梶井龍太郎、沖野成紀、近藤真由、檜垣智也、松本奈穂子の音楽系教員5名、映像領域を専門とする瀧健太郎、人間環境学科から保全生物学・水族の繁殖生態学を専門とする北野忠、水文学・雪氷学・地球環境化学を専門とする倉本隆之の8名で、プロジェクト代表は松本である。予算は各教員均等配分とし、音楽系教員5名の予算は上記①に関する出演予定学生の演奏能力向上のために、IIIで述べるプロの演奏家によるレッスン謝金に充当された。瀧の予算は上記②に関連する映像演出に必要な機材準備に、北野・倉元の予算は上記③に関連する写真等の視覚資料収集準備のために充当された。

次に、国際交流演奏会実施に向けた活動の概要を以下に述べる。近藤、沖野、檜垣、松本は2024年度内に数回行われた先方とのオンライン国際会議に参加し、合同演奏会場候補の2号館で大規模な演奏会開催経験のある梶井の助言を受けつつ、実現に向けての調整を行った。音響は檜垣が担当予定であった。大掛かりな演奏会が見込まれたことから音楽系教員全員が事前の認識共有を学長室国際担当および先方と行い続けた。同年度秋にはコーディネーターと指揮者が来校した。はじめに学長代理の梶井と面会し、その後学長室国際担当と松本の案内の

投稿日 2026年02月03日 受理日 0000年00月00日

*所属 東海大学教養学部 *芸術学科 **人間環境学科

下 2 号館などを見学した。国際交流演奏会の他に、ブルガリア民俗合唱や演奏者のワークショップなども別途検討されていたことから 13-201, スタジオソナーレなどの施設も紹介した。

一方で出演学生の検討も必要であった。これは近藤・松本を中心に出演予定学生と演奏曲目候補の選定が行われた。詳細は III で述べる。また、クラシック音楽舞台演奏と映像演出との可能性についても準備を進める必要があった。そこで松本と瀧はグローバルフェスタ松本企画の一部の学生演奏に映像をつけるための試みを行った。詳細は II で述べる。北野、倉元は地球・自然・水などをキーワードとした環境関連視覚資料の収集を行った。

本稿では II, III 章にて活動事例の一部を報告し、IV にて結びとする。

II. グローカルフェスタ企画「世界 ♪ 音めぐり ♪ 古楽器体験と学生演奏会」における 演奏と映像のコラボレーション

□本章では、クラシック音楽舞台演奏と映像演出準備に関する試みの事例について述べる。事例は 2024 年 10 月 12 日（土）に実施された TOKAI グローカルフェスタ（注 3）の松本企画「世界 ♪ 音めぐり ♪ 古楽器体験と学生演奏会」内演目のうち 3 曲の学生演奏発表（音楽領域学生）と学生作成映像（映像領域学生）の融合である。教養学部で初の、クラシック音楽演奏と映像によるコラボレーションの試みでもあった（注 4）。パイプ・オルガン、チェンバロ、フォルテピアノ、クラヴィコードなどの鍵盤古楽器教育はピアノ・古楽器教育を展開する松本研究室で行われている（注 5）。松本研究室では上記グローバルフェスタでこの古楽器体験と学生演奏の企画を単独で 2018 年から行っている。2024 年度の学生演奏は 8 演目の中から曲想と視覚表現の親和性を考慮し 3 演目を選び瀧に相談したところ映像との融合協力を快諾くださった。松本と演奏出演予定学生、瀧と造形芸術専攻大学院瀧研究室学生（尹 喬成、王 一晨、李 怡然の 3 名）による打ち合せは 2 回行われた。第 1 回は学生の演奏と楽曲説明を聴きながら対話を重ねてイメージを膨らませ、次回までに準備する映像作品の着想を得た。第 2 回は瀧指導の下準備してきた映像がソナーレの天井および壁面に映し出され、演奏と合わせながら調整を行った。準備期間や双方の学生の対話、役割、照明など様々な点で今後の課題が見出されたが、そうした課題の抽出も含め大変有意義であった。以下に 3 演目について簡潔に報告する。なお本章は松本と瀧によるプロジェクトに関連づけた活動の一つなので補助金予算は用いられていない。

1 曲目はフォルテピアノ独奏、ベートーヴェンの『ピアノ・ソナタ Op.27-2』の第 1 楽章である。2 年生の三井涼太が演奏を担当した。楽曲の通称に含まれる「月」の投影位置などを調整しながら夜の情景を滝研究室大学院生が作成した。2 曲目は C.グノーの『アヴェ・マリア』で、フルートが旋律を、パイプ・オルガンが伴奏する編成とした。フルート演奏は音響芸術専攻の大学院 2 年生戸川竣介、パイプ・オルガン伴奏は前述の三井が担当した。教会のような建築物の円窓相当部分にライブカメラで撮影された演奏者を投影する工夫が施された。3 曲目は C.ドビュッシーのピアノ組曲『版画』より「塔」である。演奏は音響芸術専攻 1 年生松原彩花が担当した。標題からアジアらしさを基調とし、樹々の緑と滝のような水流を組み合わせた映像が作成された。

III. 学生の活動と芸術学科音楽学課程第 54 回定期演奏会

□本章では、2025 年度演奏会に向けて学生が行った準備活動と、その一部の成果発表の場となった 2024 年度の音楽学課程第 54 回定期演奏会について述べる。本章は音楽関連教員の梶井、沖野、近藤、檜垣、松本 5 名のプロジェクト予算全額が学生の演奏能力向上のためのスポットレッスンに用いられた。

III-1 出演者・演目選定

ブルガリアの芸術アカデミーが当初より提示した合同演奏曲目案は G.ホルスト作曲『惑星』より「木星」、ドビュッシー作曲『月の光』などのクラシック音楽作品であった。基本的には本学学生の演奏数曲、ブルガリア側の演奏数曲、合同演奏を計画した。前述の通り「地球を守ろう」が演奏会のコンセプトであるため、地球・宇宙・自然などに関する曲目選定が相応しいことから、演奏能力が比較的高い吹奏楽研究会所属の芸術学科学生と相談

を重ね、演奏学生と編成、曲目候補を選定した。金管は八重奏を検討、木管アンサンブルは長尾淳作曲のサキソフォン四重奏『彗星』、渡部哲哉作曲木管五重奏『落ち葉の舞う季節』を候補に出していた。出演者・編成・曲目選定にあたり、木管アンサンブルの検討は吹奏楽研究会所属の芸術学科3年生伊藤小花、金管アンサンブルの検討は荒井万里が中心となって吹奏楽研究会メンバーと検討を重ねることに尽力した。学生との連絡、調整、指導を担当したのは主に松本と近藤である。□□

III-2 芸術学科音楽学課程第54回定期演奏会

□上記出演予定学生たちへの演奏指導は音楽系教員予算から充当予定であった。しかし学生たちとの相談で、吹奏楽研究会の活動がかなり忙しく楽曲への着手は早くても年度末3月になりそうであること、演奏指導はその出来具合により依頼するのでさらに先になることなどが明らかになった。そこで、これに関するプロの演奏家による演奏指導は2025年度に組み込むこととした。2024年度中は演奏意欲が高い学生たちのために演奏オーディションを行い、合格学生に第54回定期演奏会出演とプロジェクト予算による演奏家による演奏指導謝金を充当することとした。背景には2022年度カリキュラムで非常勤講師による演奏実技指導が認められていないことによる学生の演奏能力低下・モチベーション低下がある。合同演奏に耐えられる演奏や舞台での実力発揮ができるかも不明であった。通常授業ではプロの演奏家による指導が受けられないが、能力は認められる学生たちのために学びと発表の機会を与えることで、次年度の演奏会における能力の底上げが期待された。オーディション合格により出演できる演奏会は、長年芸術学科音楽学課程が、その年の優秀演奏学生を選抜して開催してきた定期演奏会である。演奏会の準備・運営統括は数年前から松本が担当している。演奏会当日は近藤が受付管理、檜垣が動画・写真撮影を指導し、檜垣研究室3年生の金子琉奈が写真撮影を担当した。写真2はそのうちの1枚である。



写真1 ピアノ独奏（松本撮影）



写真2 サキソフォン二重奏（金子琉奈撮）

オーディションは、音楽学課程学生のピアノ出演者を選抜するためのピアノ・オーディション（11月14日）の後に行われた。芸術学科学生の応募はサキソフォン二重奏とピアノ独奏各1エントリーであったが、どちらも定期演奏会に出るだけの実力があると認められ、合格となった。サキソフォン二重奏は3年伊藤小花（アルト）と2年野村能也（ソプラノ）で、長生淳作曲『天頂の恋』である。ピアノ独奏は2年三井涼太で、ショパン作曲『英雄ポロネーズ Op.53』である。サクスの演奏指導はサキソフォン演奏者の滝上典彦、ピアノの演奏指導は藤岡由記に依頼した。両者とも音楽学課程において各楽器の演奏指導に携わって来られたプロの演奏者である。ピアノの三井は音楽実習B2において松本も毎週レッスンをを行い指導した。サキソフォンの演奏指導教員と学生との日程が合わず消化しきれなかった管楽器分の予算は、合同演奏会出演予定であったトロンボーンの荒井等2名の演奏指導謝金に充当した。レッスン日調整や演奏のサポートは松本と近藤が主に行った。指導をいただくことで各自能力の向上に繋げ、本番に臨んだ。第54回定期演奏会は2024年12月17日、桜木町にある神奈川県

立音楽堂にて開催された。音楽学課程の学生たちと共に、3名の芸術学科学生も日頃の成果を発揮することができた（写真1、2）。

IV. 結び

□本プロジェクトは2025年度も継続して件の国際交流演奏会開催に向けて準備を進める予定であったが、演奏会は様々な要因から最終的に実現されなかったため継続プロジェクトは不可能となった。しかしながら実現に向けて行われた諸々の試みや工夫、努力は無駄になるものではない。例えば、出演予定であった学生たちの一部はオーディションという一つのハードルを越え、学外での演奏機会を得るための努力をし、オーディション合格後はプロの演奏家の指導を受けることで、さらに演奏技術向上に繋げる教育的効果があった。地球や自然に関連する音楽作品の標題と自然環境研究領域の知見を結びつけるための萌芽もあり、さらに教育・研究交流を深めることで有意義なアウトプットが期待できると考える。今後も各領域が自立しながらも相互に尊重し合い、様々な知や実践の交流・融合を行うことで学部教育・研究発展に寄与するような試みを模索し続けていきたいと考える。

注

- 1) <https://try.artacademyplovdiv.com/EN/structure.html>(最終閲覧 2026 年 1 月 29 日)
- 2) AMDFA が合同演奏会のイメージとして共有した過去の演奏会 URL は
<https://www.youtube.com/watch?v=icvMiBouOu4>(最終閲覧 2026 年 1 月 29 日)
<https://www.youtube.com/watch?v=mq8kjoMy9r8>(最終閲覧 2026 年 1 月 29 日)
- 3) グローカルフェスタの予告サイト <https://www.u-tokai.ac.jp/collaboration/local/global/>(最終閲覧 2026 年 1 月 29 日)
- 4) <https://www.u-tokai.ac.jp/ud-humanities-and-culture/news/10816/>(最終閲覧 2026 年 1 月 29 日)。たとえば大仁田；鈴木 2019、森 2023 などのように音楽と視覚表現の融合は新しいものではない。演技を含まない演奏においても様々な視覚表現との融合が毛利；土屋 2022、出原；出口；種岡；今村；佐竹；本間；森山；米倉；中谷 2025 など様々な場所で試みられている。
- 5) 東海大学教養学部芸術学科音楽学課程所蔵の鍵盤古楽器とその活用については松本 2023 を参照。

引用文献

- 出原立子；出口輝；種岡光児；今村駿介；佐竹康平；本間尋斗；番場蓮；森山翔；米倉裕貴；中谷太一
 2025「Connect Kanazawa 2: 人と街を繋ぐ体験創出システム」、『デザイン学研究作品集 30-1』
- 松本 奈穂子 2023 「東海大学教養学部芸術学科音楽学課程所蔵の鍵盤古楽器とその活用：クラヴィコード、チェンバロ、フォルテピアノ、パイプ・オルガン」、『東海大学紀要 教養学部 53』 pp.147-162。
- 毛利 仁紀；土屋 雅人 2022 「オーケストラを楽しむための映像演出システムの研究」、『日本デザイン学会研究発表大会概要集 69』 pp.236-237。
- 森 佳子 2023 「1830, 40 年代パリのグランド・オペラの舞台美術・演出」『多摩美術大学研究紀要 37』、pp.141-153。
- 大仁田雅彦；鈴木大介 2019 「オペラにおける映像技術の変遷」、『日本のオペラ年鑑 2019』、昭和音楽大学オペラ研究所、pp.81-84。